

チェーホフの「新しい生活」の表象について ——『いいなずけ』を中心とした試論——

高田 映介

はじめに

以前の生活秩序から脱して明るい「新しい生活」が到来するというテーマは、アントン・チェーホフ(Антон Павлович Чехов, 1860-1904)の晩年の創作にしばしば見出される。最後の小説『いいなずけ』(Невеста, 1903)¹の主人公ナージャが旧来の生活と決別し希望に満ちて出発する結末は、特にこのイメージと結びついている。しかし、結末にある種の不穏が残されていることもまた、作品の発表当時から指摘されていた。たとえば、批評家のボツヤノフスキーは「ナージャの勉学のための脱出こそは、チェーホフの作家活動における新しい段階と見なされるべきである」(10: 473)としながらも、作品の最後のフレーズ「——二度と戻ることはないだろうと思ひながら」(10: 220)を指して、「チェーホフはまだ猜疑心や悲観主義を振り払うことができていない」(10: 475)と述べた。

「新しい生活」の観念を検討するために、どのような視座に立つことが有効だろうか。従来、革命の機運を前にした作者の心境の変化からこのことを捉えようとする見方があった。² しかしながら、本文で後述するように、革命的な出来事に対してチェーホフが『いいなずけ』で直接的な反応を示したと見なすことには疑問の余地がある。われわれにとってより興味深いのは、最後のフレーズが校正で挿入されたという事実だ。つまり、ボツヤノフスキーの不満はともかく、ナージャは「新しい生活」まで本当には行きつけないかもしれない疑いを示唆することは、作者の意識的な作業であったと考えることができる。これを踏まえて、ナージャが向かう「新しい生活」の表象の実態をテキストの生成過程および構造の点から分析してみたい。

本論は以下のように構成される。『いいなずけ』はチェーホフにあって珍しく草稿、清書原稿と校正刷りが残されている作品である。第一章ではこれらのヴァリエントを比較し、人物が「ここではないどこか」へ出て行くことを願うチェーホフ的な「逃避」のモチーフ³をめぐって語り・人物像・内容

¹ チェーホフのテキストは *Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30 томах*. М.: Наука, 1974-1983. を底本にし、本文中に巻数(アラビア数字)と頁数(アラビア数字)をコロンでつなぎ、()内に示した。書簡は巻数の前に П. を加えた。翻訳は既存訳を参考に、本稿筆者が訳出した。なお、すべての引用中の[]は本稿筆者による中略、ないし補足を示す。

² たとえばガイドウクは、1887年から1904年というやや長いスパンではあるが、チェーホフの創作に一貫しかつ後年にかけてますます強まる歴史的・政治的意図を見ている。См. *Гайдух В. К. Творчество А. П. Чехова 1887-1904 годов: (Проблемы эволюции)*. Иркутск: Иркут. ун-та, 1986.

³ ガルドーヴィチによれば「逃避」のモチーフは人物の「自分の生活を変えたいという願望」と結びつき「空間からの逃亡」という形であらわれるもので、チェーホフの作品にきわめて頻繁に見られるモチーフである。Гордович К. Д. Мотив бегства из привычного пространства в произведениях А. П. Чехова // *Чеховские чтения в Ялте* Материалы XXX Международной научной конференции. Том Выпуск 15. Симферополь: Доля, 2010. С. 210-216.

面の変遷とその効果を追う。そのことにより、推敲を重ねるごとに「新しい生活」はナージャの主観的願望としての様相を強め、その実像が曖昧にされていったことを明らかにする。

その一方、チャーホフの他の多くの作中人物と異なり、ナージャは「新しい生活」に向けて実際に一步を踏み出す点で際立っている。そこで第二章では過去の描写に注目し、彼女の家出が周囲の人物を巻き込んで過去との断絶を引き起こすことを、同様に人物と過去が断絶する『退屈な話』(Скучная история, 1889)などに見られる現在／過去の描写と比較し分析する。これにより、結末におけるナージャの出発は、過去とのつながりを失ったことの反動として生じるさまを検討する。

さらに第三章では、社会レベルでの「新しい生活」の表象に目を向ける。世代交代が進んでいけば今ある問題は解決され、理想的な新社会が訪れると作中で語られる『知人の家で』(У знакомых, 1898)『往診中の一事件』(Случай из практики, 1898)と比較しながら、このテーマを生物学的進化と絡めた人間の夢の観点から読み直すことを試みる。以上の分析を通じて、チャーホフが未来や過去を描くアプローチをよりよく理解するための思考の枠組みを整理することが本論のねらいである。

1. 人物の願望としての「新しい生活」

1.1. ナージャの行為の動機と目的

『いいなずけ』を作家の新展開と見なした批評とは裏腹に、チャーホフ自身は妻に宛てた手紙で「このような作品を僕はもう何度も書いた。だから、新しいものは何もありません」(II. 11: 184)と書いた。この言葉を文字通り解するかには慎重であるべきだとしても、ソ連・ロシアのチャーホフ研究者カターエフは『チャーホフ百科』のなかで、作品の構成の軸はチャーホフにあって典型的なものだと指摘している。すなわち、「どこへ」「どうやって」出て行くかではなく、ひたすら「何かから逃げ出す」ことに重点が置かれているような人物の逃避願望を中心に物語が展開するのである。⁴ この指摘の通り、本作は「この生活がいやになった」(10: 214)というナージャの思いが次第に強まっていき、ついに彼女が生家からの家出を実行するところまで行きつく。注目したいのは、ナージャがそのように思い始める理由が明確に示されていない点である。

ナージャはもう二十三歳だった。十六歳の時から熱烈に結婚を夢見てきた彼女は、ついに今、アンドレイ・アンドレイチ、窓の向こうに立っているあの人のいいなずけだった。彼はナージャの気に入っていたし、結婚式の日も七月七日にもう決まっていた。それなのに喜びはなく、夜もよく眠れず、快活さも消えて失せた。(10: 202)

⁴ Катаев В. Б. (ред.) А. П. Чехов Энциклопедия. М.: Просвещение, 2011. С. 129.

長年の夢がいよいよ叶うという時になって、なぜナージャは「喜びはなく、夜もよく眠れず、快活さも消えて失せた」のか、その理由はテキストに示されていない。婚約者への愛のなさや俗悪な新婚生活の予感など、理由になりそうな事柄がナージャに意識されるのはようやく第三章に入り、婚約者と新居の下見をする時にすぎない。実際には、ナージャは作品のまったく冒頭からいわれのない不安を抱えている。よく似た文章が二章の始めに繰り返される。

昨夜と同じ、単調で不必要な、しつこい考えが頭に浮かんた。アンドレイ・アンドレイチが自分を口説き始め、ついにプロポーズをしたことや、自分がそれを受けたこと、それからだんだんと彼の善良さと人のよさが分かってきたことが頭に浮かんた。しかしなぜか今、結婚式までひと月足らずを残すのみになって、彼女は何か漠然とした、重苦しいものが自分を待ち受けているかのような恐れと不安を感じ始めた。(10: 206)

清書原稿では、アンドレイ・アンドレイチがナージャを口説き始めたのは「彼女が自分自身をもうオールド・ミスだと感じ始め、結婚の望みを捨てかけていたその時だった」(10: 277)という一文があった。さらに、「もし何かで結婚式が秋まで、それかいつそ冬まで延期されれば。色々なことをもっとよく考える時間をもてれば、きっと、もっと強く婚約者を愛するようになって、幸せになれるかもしれないのに……」(10: 277)とナージャの心理を代弁する一文も存在していた。つまり当初は、結婚を夢見るあまりに性急にプロポーズを受けてしまい、まだ心の準備ができていない、という具合にナージャの不安の理由が説明されていた。しかし三度の校正を経てこれらの文章は消され、上に挙げた引用に見る通りになった。結婚に対するナージャの「恐れと不安」は彼女のその後の行動(婚約破棄、ペテルブルグへの出発)に不可欠の動機だが、チャーホフの加えた改変は、不安が生じる理由をあたかも意図的に隠すかのようだ。

「作者の客観的な語りにはその第一行目からナージャ・シューミナの主観的知覚が含まれている[……]他の人物は彼女の周囲にちらばっている。彼らのことを書く時、作者はナージャとの関係に言及することを忘れない」⁵ というセマーノヴァの指摘に目を向けよう。この指摘の通り、たとえば、初校まで冒頭は「早く上に行きな、せっかち屋が呼んでるよ！」(10: 268)という小間使の腹立たしげな声から始まっていた。「せっかち屋(Дзыга)」は召使たちがナージャの祖母に対してつけたあだ名であり、かつ召使に対し専制的に振る舞う祖母の人物像と一体をなしていた。しかし校正を経て、召使らが不満気にあだ名を口にする一連の流れそのものが削られた。代わりに、夜食の席につい

⁵ Семанова М. Л. Чехов-художник. М.: Просвещение, 1976. С. 181.

ている祖母が「祖母、あるいは家での呼ばれ方にしたがえば、おばあちゃま(бабуля)」(10: 204)と紹介され、ナージャから見た祖母との関係を示す呼称に変えられた。あとの場面でも祖母を指す際にこの「おばあちゃま」という語が使用されている。サーシャに関しても、「十日前にモスクワから客になりて来たサーシャ・ゲラシモフ」(10: 270)という清書原稿での客観的説明から、「アレクサンドル・チモフェーイチ、短く言えばサーシャ」(10: 203)という風に、ナージャが彼を呼ぶ際の愛称に応じた形に変えられた。副次的人物の呼称の改変は、ナージャという視点人物を中心とした語りの特徴が次第に強調された結果であると考えられる。つまり、『いいなずけ』の語り手は物語られる世界の圏外に属しているが、一貫してナージャの思考と知覚に寄り添っていてもと言える。本作に多用される「なぜか(почему-то)」という言葉の使われ方をめぐって、このことをさらに考えてみたい。

清水道子は次のように述べている。「「なぜか」という言葉はこの物語にあっては実に 13 回もくりかえされ、主人公の内面を分析的にはなく暗示的に表現する特徴的な形式となっている。主人公の心はこの「なぜか」に導かれて呈示されていく」。⁶ 先に見た通りナージャの逃避願望の発端が明らかでないことから、ナージャの心理が暗示的に表現されていることは確かだが、一方でこの語はどのようにヒロインの心理を「呈示」しているだろうか。

「今夕明かりのもとで窓越しに見る母親は、なぜかとても若々しく見えた」(10: 202)「ナージャは同じことを去年も、たぶん一昨年も聞いたような気がして、今ではサーシャがそれ以外の議論はできないことを知っていた。以前はそのことがおかしかったが、今はなぜかむかむかしてきた」(10: 204)「しかしなぜか今、結婚式までひと月足らずを残すのみになって、彼女は何か漠然とした、重苦しいものが自分を待ち受けているかのような恐れと不安を感じ始めた」(10: 206)など、「なぜか」を含むこれらの例で、語りはナージャに母親が年齢よりも若く見える理由、以前はただ滑稽に思えたサーシャが今はナージャをいらだたせる理由、ナージャが結婚を前に不安や恐怖を感じる理由を説明することもできたはずだが、彼女の知覚や認識の限界点にその理由を語らずに置く。語りはナージャの心理を彼女自身にもよく分からないものとして「呈示」することによって、ナージャの恐れや不安の理由の無さを印象づけてさえる。

ジュネットの言う「内的焦点化」⁷、つまり人物の「視野の制限」のなかで物語り、ナージャの認識の限界に留まるような語りの特徴は、ナージャの「逃避」の願望が前景化してくる決定的な場面にも見出される。

彼[サーシャ]の夢にも、あの奇跡的な庭や見たこともないような噴水にも、何だかばかげた

⁶ 清水道子「チェーホフの短編小説の創作方法の発展——伝統的リアリズムから「象徴的リアリズム」へ」『スラブ研究』37号、1990年、92頁。

⁷ ジェラルド・ジュネット／花輪光弘訳『物語のディスコース——方法論の試み』水声社、2004年、222-226頁。

ところが感じられる。それでもなぜか、彼の無邪気さや、ああしたばかげた夢にも非常な素晴らしきがあつて、勉強にでも行こうかなと思いついたりすると、ただそう思っただけで気持ちがすがすがしくなつて、喜びと嬉しさが胸がいっぱいになった。(10: 209)

ここでも、ナージャにとってかつて「滑稽」なものでしかなく相変わらず「ばかげたところ」が感じられる「サーシャの夢が、今はそれでもなお「非常な素晴らしきがある」と感じられる理由が説明されることはない。すでに見たようにナージャの行為の動機が不明であることを考え併せると、「勉強にでも行こうか」という思いつきはまさに「ふと」したもの、突発的なものとして響く。

また、ナージャがペテルブルグから一旦帰って来る場面で、清書原稿ではペテルブルグでの生活に満足しているかという母親からの問いに対し、ナージャは「もちろんよ、学校に入った時は、これでもう全部だ、もうこれ以上望みはないと思ったけど、今こうしてしばらく勉強してきたら、目の前に新しい計画が開けたの。それからまた新しい、いっそう広い広い計画が開けて来て、勉強にも努力にも終わりなんてないような気がするの」(10: 297)と答えていた。しかし、校正を経てナージャの返答は「満足よ、ママ」(10: 218)という短いものに変えられ、ナージャの新生活や行動の具体性が減じた。

ナージャの行為を革命への参加、あるいは女性の自立や解放と結びつける傾向もある。しかしその傾向に確然たる根拠があるとは言ひ難い。草稿から校正刷りの段階まではナージャが思い描く「新しい、広い、はてしない生活」に「新しい、広い、はてしない労働(трудовая)生活」(10: 299)という形容詞が認められる程度で、彼女が革命に入っていくことを直接的に示す言葉は当初から使われていなかった。そして「労働の」という語はのちに削除された。首都での彼女の目的は二度の校正を経ても限定されないままだったのだし、この非限定性は校正の過程で強調されてきている。以上見てきたように、ナージャの行為の動機と目的は、推敲を重ねるごとに曖昧にされていったことが指摘できる。

1.2. 扇動者サーシャ

傍目には「仕合わせそのもの」の「今の生活」にナージャは「甘んじることができない」⁸ 理由がテクストのうちになく、彼女の転向の原因は明確でなく、新生活の詳細も不明瞭であるとすれば、ナージャに「生活を変える」(10: 214)よう最初に呼びかけるサーシャの存在意義は大きい。しかし、サーシャの描かれ方と作中での役割もまた、草稿から最終稿に至るまでに変化している。

第一章でサーシャがシューミン家や周囲の人の無為と召使たちの劣悪な環境について話す時、

⁸ 浦雅春『チェーホフ』岩波新書、2004年、129頁。

ナージャは「同じ話ばかりで聞き飽きたわ」(10: 204)と言って取り合おうとしない。清書原稿では続く第二章において、サーシャと祖母がナージャの面前で「死んだような町」と「死んだような人々」について長く言い争う(10: 280-281)。そしてこの議論は、その後ナージャがシュエミン家のこれまでの生活は「ちっぽけ」で「くだらない」(10: 213)ものだと思い始めるための重要な役割を果たしている。しかし、この場面は全面的に削除された。

ナージャのペテルブルグ出立直前の会話の変遷を見れば、サーシャとナージャはあたかも役割を取り換えたかのようなものである。当初サーシャはナージャの訴えを聞くとすぐさま了解し、家を出ることをナージャに提案するのであり、草稿ではここに熱狂的な演説も書かれていた。清書原稿でも、いくらかは簡略化されたものの、自分を見送りに来るふりをしてそのまま発つことをサーシャが提案し、ナージャが同意する順序は同じである。これに対し最終稿では、ナージャが「どうして今までここで生活できたのか分からない、理解できないの。[……]この怠惰で無意味な生活全部を軽蔑しているの」(10: 213)と言い出しても、サーシャは事態を飲み込めずに困惑している。ナージャが「明日私は発ちます。一緒に連れて行って、後生ですから！」(10: 214)と口にしたところで、初めて彼はナージャの決意を理解するのである。二つの例からだけでも、草稿からの改変を通じて、サーシャの言動の量と影響力が減っていることを指摘できる。

削られたり、抽象化されたりしたサーシャの台詞にはまた、彼が革命家であることをほのめかす要素が含まれていた。サーシャが口にする「生活を変えさせれば、すべてが変わる。一番大事なことは生活の方向を変えることで、あとのことはたいしたことじゃない」(10: 214)という台詞に目を向けたい。この台詞は二回目の校正で書き加えられ、削除されることなく決定稿まで持ち越された。ただし、この台詞の周辺では大きな変更があった。病氣療養のために自分と一緒に故郷に帰ることをナージャが懇願する場面で、第二校でチェーホフが修正を行う前には以下のようなやり取りが見られた。

「ああ、なんてこと」ナージャは心配し始めた。「なぜ治療しないの、なぜ自分の健康を気遣わないの？ [……]」

「ハ、ハ、ハ！」サーシャは笑い出した。

「今日にもあなたをうちに連れて行くわ。支度してちょうだい！」

「だめだよ」とサーシャは言った。「お宅には来年うかがうよ。僕は明日ヴォルガへ行くんだ、そう、ある若い男と一緒にね。良い奴なんだけど、ただちょっと変わっていてね。『腹が空いたな』とか、『僕はひどく侮辱されたんだ』とか『暴力に圧されて、我々は退化しているんだ』とか彼に言うとする、と、向こうはこっちに答えて、偉大な異端審問官とか、ゾシマとか、神秘的な気分とかのことを小突き回す。というのは、質問に直接答えるのを恐れているからなんだ。だって

質問に直接答えるなんてことは——恐ろしいことだからね！[……]

「そんなことみんなばかげてるわ！」ナージャは涙声で口走った。「今日にも私と一緒に来てちょうだい、でなきゃここで死んでしまうわ！なんて顔をしているの！」

そのあとでナージャは次第に落ち着きを取り戻した。ペテルブルグについて、新しい生活について話した。サーシャはしじゅう有頂天になって喜んだ。

「素晴らしいぞ、実に素晴らしい」と彼は言った。「僕はとても嬉しい。誓って言うけれど、あなたは後悔もしないし、しまったと思うこともないでしょう。仮にあなたが犠牲になるとしても、それは必要なことなんだから。だって犠牲なしでは成し得ない、階段だって下の段がなくては成り立たないもの。その代わり、後世の子孫たちは感謝して、ありがとうと言ってくれることでしょう」(10: 317)

「質問に直接答えるのを恐れている」友人の青年という意味深長な設定に加えて、沼野充義によれば、「仮にあなたが犠牲になるとしても、それは必要なことなんだから」「犠牲なしでは成し得ない[……]その代わり、後世の子孫たちは感謝して、ありがとうと言ってくれる」というサーシャの台詞は「明らかに、ナージャが革命運動に身を投じて犠牲になることを仄めかすもの」⁹ だという。だが、これらの言葉は削られ、決定稿は以下のようになった。

「サーシャ、ねえ」と彼女は言った。「あなた、病気なんでしょう？」

「いや、なんでもない。病気だけど、たいしたことは……」

「ああ、サーシャ」ナージャは胸がどきどきしてきた。「なぜ治療をしないの。なぜ自分の健康を大切にしないの？ 私の大事なサーシャ」[……]

「僕は明後日ヴォルガへ行く」とサーシャが言った。「それからクムイス療法を試すんです。クムイスを飲んでみたくてね。友人夫婦が一緒に行くんだけど、奥さんが実に立派な人なんだ。僕はしじゅう彼女をけしかけて、勉強に出かけるようにすすめています。あの人が生活を一変してくれたらいいと思って」(10: 216-217)

校正途中の原稿と異なり、決定稿でサーシャは自らが病気であることを認めており、ヴォルガへ行くのも治療のためである。同伴者についても単に「友人夫婦」となり、さらに友人の妻を「けしかけて、勉強に出かけるようにすすめて」いるサーシャの行動が書き加えられた。改変はサーシャの病状の深刻さを強調し、自らの死を前にしてもナージャにしたのと同じように他人を扇動することに

⁹ 沼野充義「チャーホフ：七分の絶望と三分の希望」講談社、2016年、246頁。

没頭している彼の行為に、習癖的で無分別な性格を与えている。

サーシャの影響力が少なくなり、彼の発言から具体性が減っていく過程を、ナー ज्याの独立性の強調と取ることができるだろうか。しかしカターエフが指摘するように、またわれわれもすでに見てきたように、チェーホフが「一貫してナー ज्याの未来像における具体性を排除し、言い切らなさ、曖昧さ、多義性を強めた」¹⁰ ことからすれば、サー ज्याの役割の減少は、むしろナー ज्याの行為の現実味と具体性をいっそう薄めるように働いていると考えられる。

以上の分析から、これまでの生活を棄て、それとは違った「新しい生活」を始めたいというナー ज्याの願望は、語りの特徴や諸々の改変を通じて不明瞭な形で描かれていること、そのため「新しい生活」自体が具体性を欠く不透明なものとして示されていることが指摘できる。

2. 過去との断絶

一方でまた、トーマス・マン(Thomas Mann, 1875-1955)が言う通り「ナー ज्याは実際出発する」¹¹ 時点で際立っているし、それが彼女をして「新しい生活」に参加する唯一のチェーホフの主人公と思わせることも確かである。これまでの分析を踏まえ、作中に見られる過去の描写に注目してこのことを検討してゆく。

本論 1. 1. で見たように、『いいなずけ』の語りは基本的にナー ज्याの知覚に従う。そして、周囲の人間に対するナー ज्याの認識や評価の変化もまた、ナー ज्याの目から見た彼らの外見上の変化としてあらわれる。第一章の時点でナー ज्याに母親は「なぜかとても若々しく見え」(10: 202)、彼女はサーシャに「ここから見ると、あんなに若く見える！ お母さんにだって、そりゃ欠点はあるけれど[……]でもやっぱりすごい人だわ」(10: 203)と言う。ところが第二章に入るともう様子が変わる。不眠に悩むナー ज्याが、一番の理解者である母親に相談するものの外的な答えが返ってくる場面で、母親は自分の気持ちを理解してくれないし、理解することもできないのだと彼女は突然気がつく。その後ナー ज्याの逃避の願望が高まるにつれて、母親に対する評価は「当たり前な、平凡な、不幸せな女」(10: 209)という風に下降していき、婚約破棄を宣言した際の「とても小さくてみじめな、愚かしい女」(10: 213)という印象を経て、首都から家に戻って来た時には母親が「めっきり老けて器量が落ち、どことなくしなびたように」(10: 217)ナー ज्याには見える。ナー ज्याが「新しい生活」に一步また一步と近づいていくのに伴って、母ニーナ・イワーノヴナは彼女の認識のなかで年齢相応に、あるいは年齢よりもさらに「老け」「しなび」ていく。「なぜか」という語の使用をめぐってすでに指摘したように、母がそもそもナー ज्याの目に若く映じる理由を語りが明らかにしていないことからす

¹⁰ Катаев. А. П. Чехов Энциклопедия. С. 129.

¹¹ Манн Т. Собрание сочинений в 10 томах. Т. 10. М.: Государственное издательство художественной литературы, 1961. С. 535.

れば、これは客観的な実際の変化というよりは、ナー ज्याの知覚における変化であると考えられる。祖母もまたナー ज्याの出発後には「もうすっかり老け込」む(10: 217)。

また、家出から一年たって帰省する際にナー ज्याがモスクワに立ち寄る場面で、サーシャは「見た目にも不健康で、疲れ切っており、老けて、痩せていた。咳ばかりしていた。なぜかナー ज्याにはサーシャがくすんで田舎くさく見えた」(10: 216)と書かれている。再び「なぜか」という語によって、語りはナー ज्याの知覚を代弁している。そうであるとすれば、病気がサーシャを衰えて見せているだけではない。続く箇所にある通り、「サーシャからも、彼の微笑からも、彼の姿全体からも、何かもう終わってしまったような、古びてとくに時機を過ぎて、たぶんもう墓のなかへ葬られたような雰囲気がかたよってくる」とナー ज्याが感じるのは、「ペテルブルグでひと冬を過ごした」ためである(10: 217)。サーシャの変化は死を予感させるものだが、その予感にすらさほど心を乱されない。のちにサーシャがサラトフで死んだことが電報で報じられる時には、彼は文字通り過去の人となる。

このように、ナー ज्याの知覚を通じた周辺人物の変化は、ナー ज्याの家出の「以前」と「以後」に対応する形で生じている。このコントラストにおける過去の描かれ方に目を向けよう。老け込んだ祖母と、「めっきり老けて器量が落ち、どことなく体中がしなびたように見える」母とが、ナー ज्याの部屋で抱き合って泣く場面に次のように書かれている。「祖母も母も、過去が永遠に失われて、もう取り返しがつかないことを感じているように見えた。もう社交界の地位も、以前の名誉も、自分の家にお客を招待する権利もなかった」(10: 217)。祖母や母はナー ज्याの婚約破棄によって旧来の生活様式から切り離されてしまったのだが、ここで「感じているように見えた」とあるように、そのことはナー ज्याに共有され、首都での滞在以後周囲の人々が一緒に衰えたことにも似て、「家々が小さくてぺしゃんこに見えた[……]あらゆる家がほりをかぶったようだった」(10: 217)「今はもう何か欠けていて、家じゅうが空虚に感じられ、天井が低くなったような気がした」(10: 218)「家のなかには蠅がたくさんいて、ますます天井が低くなってきた気がした」(10: 219)という具合に彼女の知覚を通して描き出される。興味深いのは、人の衰えや死の予感、家の蠅や天井の低さといったあらゆるネガティブなイメージは、かつての生活全体がナー ज्याにとり断絶された過去と感じられるようになったことを示すのと同時に、それだけではなく、現在地点における荒廃でもある点だ。

このことを詳しく見るために、人物と過去の間断絶が生じるチャーホフの他の作品と本作を比べてみたい。まず、『無名氏の話』(Рассказ неизвестного человека, 1893)を取りあげる。本作における主人公＝語り手である「私」は「退役した海軍将校」であり、現在はペテルブルグの貴族オルロフの下で本当の身分を隠して下僕として働き、政府高官であるオルロフの父を狙っている。テロリストたる「私」の造形に関して、複数のモデルの可能性がこれまでに指摘されてきた。最も多いのは海

軍将校という設定上の一致から、H. II. ユヴァチェフ が「私」のモデルであるとする説である。¹² そのことに詳しく踏み込まずとも、「元将校」であり「ある目的」を持つ人物という要素だけで、当時の読者に「元革命家」の人物像をたやすく想像させたことは疑いが無い。これを踏まえて「私」の次のような独白を引用する。

当時私は肺結核になりかけていたが、結核よりもたぶんもう少し重大な何かと同時に始まっていた。病気の影響か、そのころ自分でも気づかずに始まっていた世界観の変化のせいかわからないが、日一日とごく当たり前の、俗物的な生活を求める激しくいらだたしい欲求に私はとらわれていた。心の安らぎや、健康や、いい空気や、満腹が欲しかった。[……]私は退役海軍大尉で、よく海やわが艦隊や、それに乗って世界一周を航海した巡洋艦のことが心に浮かんた。熱帯森のなかを散歩したり、ベンガル湾の夕日を眺めたりしながら歓喜のあまり茫然となって、それと同時に故郷への恋しさに駆られる時の、あの言いあらわしようのない気持ちをもう一度味わってみたかった。(8: 139-140)

物語の開始時点で、「私」は退役海軍大尉だった過去を懐かしみながらも革命の理想に対して自分が冷淡になってしまったことを自覚しており、そのことを我ながら不思議に感じ悩んでいる。それと同時に、彼の革命活動は失敗したわけでも終わりを迎えたわけでもなく、オルロフの父を討つという可能性はまだ残されている。しかしずっとあとの十一章になって、千載一遇のチャンスに恵まれた時に「私」は彼に手を下すことができない。そして「私」はこのように思う。

今や疑いの余地はなかった。私のなかで変化が起こって、別人になってしまったのだ。自らを点検するために私は思い出そうとしたが、その途端、うっかりと暗い湿った隅を覗き込みでもしたようにぞっとした。同志や知人を思い出した。すると最初に頭に浮かんだ考えは、今彼らの誰かに出会ったら、私は顔を赤らめてうろたえるだろうということだった。いったい今の私は何者だろう？ 何を考え、何をしたらいいのか？ どこへ行けばいいのか？ 何のために私は生きているのか？ (8: 183)

『無名氏の話』の執筆が再開された当時、「元革命の闘士」は新聞・雑誌小説における一種の流行になっていた。概してそれは、自らの過去を軽蔑し否定する人物像だったと言える。チャーホフの主人公は彼らと多くの点で異なっているとはいえ、オルロフの父を討たなかったことは、「私」が活

¹² 『無名氏の話』の執筆は 1887-88 年に始められ、未完成のままの中断、チャーホフのサハリン調査を経て、93 年に完成された。チャーホフはサハリン島調査の途中、ルイコフスコエ村でユヴァチェフと面会していたという。

動に参加する契機もそこに存在したであろう、海軍大尉としての過去を否定したことにも等しい。「私」は自問自答するが、自身の過去とただ「別人」のように、「暗い湿った隅」のように隔たった結果、自らが何者かも分からず、何を考えてよいのかも、何のために生きているのかも見失う。過去との断絶は現在の自己の崩壊と等しく、そして「私」はその崩壊の前に立ち尽くすのみである。

あるいは『退屈な話』において、老教授ニコライ・ステパーノヴィチは妻の顔を見てこのように感じる。「私は自分の妻の顔を見て、赤子が驚くように驚く。戸惑いながら自問自答する。はたしてこの年老いた、ぶくぶく太った、のろくさい女が[……]昔あれほどほっそりとかわいかったワリーヤなのであろうか」(7: 255)。娘のリーザの指に、彼女が子供だった時と同じようにキスをしようとすると、彼は自らの冷淡さを自覚して恥ずかしくなる。老教授の経験している現在と過去の乖離はいちじるしい。娘も同然のカーチャとの間には現在もわずかに交流が残っているが、しかし彼女に過去の思い出を話す場面でも、ニコライ・ステパーノヴィチは「実に驚いたことに、まるまる記憶に残っていたとは思ひもしなかった詳細について、彼女に話している」(7: 283)。つまり詳細に語ることができたとしても、過去は彼自身の体験として認識されていない。チェーホフの創作における記憶の意義について論じたキルジャーノフは、このことに関連して、老教授は以前の自分と今の自分の間に連続性を取り戻そうとして何度も過去を振り返るが失敗し、現在からいつそう疎遠になったと指摘している。¹³ すなわち『退屈な話』においても、過去との断絶は現在地点における自己や生活の崩壊と一体である。

『いいいなすけ』に立ち戻ろう。セマーノヴァによれば、本作の語りが時間の経過に注意を促す時、それはクロノロジカルな指示ではなく「ナージャの時間感覚である」¹⁴ という。この指摘を踏まえて、首都で冬を過ごしたあと、生家の一切がナージャにはすでに断ち切られた過去のこととして感じられる次の箇所注目する。

この町ではすべてがとつくの昔に古ぼけて時代おくれになり、今ではすべてが終末か、何か若くて新鮮なものの始まりをひたすら待っているような気がした。ああ、少しでも早くその新しい、明るい生活が来てくれたら。その時には自分の運命を真っすくに大胆に見つめ、自分は正しいという自覚をもって、朗らかに自由になれるのに！ いや、そうした生活が遅かれ早かれやって来る！ その時はきっとやって来る、四人の女中が不潔な地下のひと部屋で暮らすようにしかできていない祖母の家など跡形もなく消えてしまって、そんな家のことなど忘れられ、誰ひとり思い出しさえしなくなる時が。(10: 219)

¹³ Daria A. Kirjanov, *Chekhov and the Poetics of Memory*, New York: Peter Lang Publishing, 2000, p. 119.

¹⁴ Семанова. Чехов-художник. С. 182-183.

語りと一体となって示される、「古ぼけて時代おくれ」な生活が跡形もなく消え去ることへのナージャの熱心な期待を通じて、今あるものが過去となり誰からも忘れられることとひきかえに「新しい、明るい生活」の到来が予感されている。サーシャの死後、似た内容が末尾で繰り返される。

彼女は、はっきりと自覚していた。サーシャが望んだように自分の生活が方向を変えたこと、ここでは自分が一人ぼっちの不必要なよそ者であり、この一切もまた自分に不必要であること、あらゆる過去が自分からもぎ取られて、焼け失せ、灰まで風に乗って飛び散ってしまったことを。彼女はサーシャの部屋に入って、そこで佇んだ。

「さようなら、なつかしいサーシャ！」

そう彼女は心のなかで思った。すると目の前に、新しい、広い、果てしない生活が浮かんできて、このまだはっきりしない、謎に満ちた生活が彼女を魅了して、手招きするのだった。(10: 219-220)

先の引用では、まだいずれ来るべき時にそうなるものとして書かれていた過去との断絶(そんな家があったことさえ忘れられ、誰ひとり思い出しもしなくなる時がきっとやって来る)は、ここではナージャによって「今ではもう、なつかしいだけの、遠い遠い過去」(10: 219)であるサーシャの死と同一視されることで、すでに完了した事柄のように書かれている。この時現在、もぎ取られて、焼け失せ、灰まで風に乗って飛び散ってしまった過去と、目の前に迫る「新しい、広い、果てしない生活」の一瞬の交差点となろう。「以前／以後」に対応した「過去／未来」のコントラストがナージャの主観的な時間感覚を介して生じている限りにおいて、積み重ねてきた過去との接続を失くし不安定になった現在は、それゆえに未来に向けた変化の契機でもあると言える。

とはいえ、ナージャの行為に「自分の社会的環境を断ち切り、自らのうちに決定的な一步を踏み出すための力」(10: 473)を見出した声と同じだけ、その「一步」が具体的でないことへの批判が存在したことを見逃すべきではない。ゲルシェンゾンは「人物は肖像ではなく、シルエットに過ぎない。ナージャがどのように新しく生まれ変わったのかは、ほとんど見るができない。彼女の精神にどのような転向が生じたのか、それについて推察することは難しい」(10: 472)と指摘している。シュリヤチコフもまた、「『生き生きした』人生について語る結末」がチューホフの創作において何かしら新しいものだとしつつ、「しかし、われわれはこの結末の価値を過大評価するつもりは全くない」と述べた。なぜならそれは、「何も限定されていないし、明確に意識されてもいない! [……]すでに彼女が新しい道に立った時にも、ナージャには「新しい」生活の課題は不明瞭で非限定的なものにしか思われていない[……]作者もまたその課題を物語の最後まで不明瞭に残している」からであった(10: 473-474)。すでに見てきたように、結婚を前にした今となって慣れ親しんだ暮らしから逃げ出

したくなるきっかけも、理由も、テキストに書かれてはおらず、「まだぼんやりした、秘密に満ちた」「新しい生活」の実像はチャーホフが校正で手を入れるたびに意図的に曖昧にされていった。そしてナー ज्याの出入が彼女には喜ばしい出来事であるとしても、それは周囲の人間を巻き込んだ過去との断絶を伴い、現在地点における荒廃の反動として生じるのだとすれば、未来に向かうとする彼女の一步に見え隠れする不穏はテキストのうちにあらかじめ含み込まれている。トーマス・マンがナー ज्याの一步の貴重さを述べるために用いた「階級の先入観からの逃亡、滅び行くもの、誤てるもの、「罪深い」ものとして感ぜられる生活様式からの逃亡」¹⁵ という言い方そのものが、過去を現在から切り離す動きによって、陰画的に不明の未来を浮かび上がらせていることを強調しておきたい。

3. 全体的未来としての「新しい生活」

3.1. 理想的社会像

ここで一旦視点を変え、「逃避」のモチーフの進展を通して示されるナー ज्याの「新しい生活」が個人的な性格をもつのにに対し、彼女を扇動するサーシャが口にする「新しい生活」は理想的社会像として捉えられている点に目を向けよう。

教養のある、高潔な人たちだけが興味深いんだし、そういう人たちだけが要するんだ。そういう人たちが増えれば増えるほど、地上に神の王国が訪れるのも早くなるんだから[……]そうしてその時こそ、ここに巨大で素晴らしく豪華な家々とか、奇跡的な庭とか、見たこともないような噴水ができて、すぐれた人々が住むようになる……(10: 208)

「神の王国」について語りながら、当のサーシャは「だらしなく、快適さなどまるで無視して行きあたりばったり」(10: 216)な生活を送っている。この箇所が続く一文「もし誰かが彼に、彼自身の幸せや個人的な生活のことを話して、誰か好きな人でもないのか聞いたら、彼は何一つ理解できないうで、笑い出したことだろう」(10: 216)は、清書原稿の段階では存在していなかった。加筆により、サーシャの考える「新しい生活」が彼個人のためのものではなく、不特定多数の人びとに関わる全体的な社会像であることが強調されている。

このような人間社会全体にとっての「新しい生活」には、池田健太郎が『往診中の一事件』を例に指摘した「作者晩年の諸作に共通な幾つかの思念」、すなわち「惰性に過ぎない日常性の放棄の勧め」や「現在われわれの煩悶や、正邪についての果てしない議論が、やがてのちの世には解決を見

¹⁵ Mann T. Собрание сочинений. Т. 10. С. 535.

るにちがいないが、その時代には現代の人間は参加し得ないという考え¹⁶と重なるところがある。そこで以下、この点にもとづき、『往診中の一事件』、さらに『知人の家で』における「新しい生活」の表象を検討する。

先に『知人の家で』を扱う。この作品にはニコライ・ネクラースフ(Николай Алексеевич Некрасов, 1821-1877)の詩「鉄道」(Железная дорога, 1864-65)からの引用が見られることが特徴的である。引用は、校正の際の大幅な修正として行われた。以下、長くなるがのちの分析に関わるため、チャーホフが加筆した部分を[]で示しながら引用する。¹⁷

日が落ちて、あたりが暗くなってきた。[線路沿いのあちこちに、緑や赤の灯りがとり始めた。……ワーリヤが足をとめて、それらの灯りに目をやりながら朗唱を始めた。

道はまっすぐ走る、
盛り土、柱、レール、橋、
両側にはロシア人の骨が……
ああ、どんなに沢山の骨が！……

「この先はどうだったかしら？ ああ、ぜんぶ忘れてしまったわ！」

炎暑の下でも酷寒の下でも身を粉にして働いた、
背中を伸ばす暇もなく……

ワーリヤは、胸に響かせるようなみごとな声で、感情を込めて朗唱した。顔が生き生きと赤らみ、目には涙が浮かんできた。それは以前のワーリヤだった。女学生のワーリヤそのままだった。彼女の声を聞きながら、ポドゴーリンは過去を思い、そのころまだ学生だった自分も、沢山の素晴らしい詩をそらで覚えていて、朗唱するのが好きだったことを思い出した。

曲がった背骨を伸ばすこともなく
今なお鈍い顔で黙り込み、……

¹⁶ 『チャーホフ全集』(神西清、池田健太郎ほか訳) 11 巻、中央公論社、1976 年、471 頁。

¹⁷ 「鉄道」に関しては以下を参照した。Некрасов Н. А. Полное собрание сочинений и писем в 15 томах. Т. 2. Л.: Наука, 1981. С. 168-172.

ワーリャはそれ以上覚えていなかった。……彼女は黙り込んで、弱々しく生気のない微笑を浮かべた。彼女の朗唱のあとでは、緑の灯りと赤い灯りが何か悲しげに見えてきた。……

「ああ、忘れてしまったわ」

するとボドゴーリンが思い出した。どうしてか偶然にも、学生時代の記憶が残っていたのだ。彼は小声でそっと口ずさんだ。

ロシアの民衆は充分に耐えた、
この鉄道をも耐え抜いた——
あらゆるすべてを耐え抜いて——
広い明るい道を切り拓くだろう……
ただ残念なことに……

「ただ残念なことに」思い出してワーリャが横から言った。「ただ残念なことに、その素晴らしい時代には、私も君も生まれることはない！」

そして彼女は、笑いながら彼の肩をぽんとたたいた。]

一同は家へ帰って、夜食の席へついた。(10: 13)

[]で示した加筆の分量はかなり多い。この大規模な改稿に関し全集の解説者は「改稿のあと[……]話の響きに「生活の新しい形態」の予感というモチーフが現れた[……]新しいモチーフ——以前の生活秩序から脱却する可能性——は『知人の家で』をそれに続く「箱」物の三部作、そして『往診中の一事件』、『いいなずけ』、『桜の園』などに近づけるものである」(10: 360)と述べている。確かに、すべてを耐え忍んでロシアの民衆が「切り拓く」「広い明るい道」という言葉は、『いいなずけ』の「新しい、広い、果てしない生活」と似通っている。とはいえ、「鉄道」の引用によって導入されたとする「「生活の新しい形態」の予感」と「以前の生活秩序から脱却する可能性」の実態について十分明確にされているとまでは言い難い。

先にネクラースフの「鉄道」を概観しておく。詩編は鉄道車内の対話を基調としている。エピグラフでワーニャ少年が「誰がこの道を作ったの」¹⁸と父親である将軍に訊ねる。将軍は「ピョートル・アンドレイチ・クレインミヘリ公だよ」¹⁹と答え、秋の自然を謳う[第一連]。乗り合わせた語り手がこれに反論して、ワーニャの眼前の自然の光景の下にある「真実」、すなわち無数の知られざるロシア民衆の肉体的苦しさの経験を語る。聞いているうちにワーニャは眠りに落ち、夢のなかで鉄道敷設夫に

¹⁸ Некрасов. Полное собрание сочинений и писем. Т. 2. С. 168.

¹⁹ Некрасов. Там же.

出会う[第二連]。目覚めたワーニャが大事業の陰にある民衆の力について父に話すも、將軍は笑って取り合わず、「死と悲しみの光景で子供の心をかき乱すのはよくない」²⁰ から、今度は「明るい面」を子供に見せてやるように語り手に促す[第三連]。これを受け語り手は、仕事は終わり、鉄道建設の働き手たちに滞納金もじきに支払われ、ワインが振る舞われることをワーニャに聞かせる[第四連]。

この詩編がチェーホフの小説に大きく引用されたことの意義について、糸川紘一は「起承転結さながらに、この四部構成の物語詩『鉄道』は十九世紀後半、帝政ロシアが半世紀後には崩壊に至るという動向のなかで、世紀を結び時代をつなぐレールのようにも読める。当時において鉄道は新時代の象徴でもあり、希望や楽観の代名詞でもあった。それがどのような「暗」と「陰」を伴っていたにせよ、その「明」と「陽」に目をつぶることはできなかった」²¹ と述べている。この指摘に同意はできるものの、「チェーホフとネクラソフはそうした意味で楽観主義を共有していた」²² と断言することには一考の余地がある。糸川の考察にあるような詩の「明暗」をめぐる「世紀を結び時代をつなぐレール」、換言すれば過去・現在・未来の表象の観点からこの点を分析していく。

「鉄道」では、第二連の「兄弟たち！ あんたたちはわたしの撒いた種を刈り取っている。わたしが皆を、この貧しい人間たちを、善良な心でもって思い出してくれているのかい、それとも随分昔に忘れてしまったのかい」²³ という民衆の歌にも見られるように、かつて民衆が「撒いた種」が現在走っている鉄道として実り、その車中にある語り手やワーニャが民衆の苦しみの過去を振り返ったり追体験したりする形で時間が構成されている。第二連の末尾では民衆が築く素晴らしい時代が未来のこととして例外的に語られるが、それはワーニャが夢のなかで聞いた語り手の声であり、すぐ第三連で目を覚ましたワーニャが夢の出来事を父親に話すことで、時間軸は再び現在に戻されている。第四連の敷設夫たちに対する報いも過去の出来事として語られてはいるが、將軍の依頼を受けて語り手が描く「喜びの絵」は架空の出来事に近い。全体としては、「鉄道」では鉄道敷設夫の労苦＝過去が詩の「暗」と「陰」に、完成した鉄道＝現在が詩の「明」と「陽」に対応している。

『知人の家で』に目を向ければ、チェーホフの引用がかつて人知れず払われた民衆の苦しみを語る第二連からのみ行われていること、かつ民衆が「撒いた種」に対する現在からの肯定や感謝が注意深く避けられていることに気がつく。たとえば上に挙げた民衆の歌は引かれていないし、ワーニャが忘れた「曲がった背骨を伸ばすこともなく／今なお鈍い顔で黙り込み」のあとをポドゴリーンがただちに引き継いだように書かれているにもかかわらず、実際は「民衆の働きをこそ祝福せよ」「百姓たちを讃えよ」といった箇所が挿入されている。詩編が完成した鉄道という「明」によって過去

²⁰ Некрасов. Полное собрание сочинений и писем. Т. 2. С. 171.

²¹ 糸川紘一『チェーホフとサハリン島——反骨ロシア文人の系譜』水声社、2018年、161頁。

²² 同前。

²³ Некрасов. Полное собрание сочинений и писем. Т. 2. С. 170.

に忘れられた無数の人々の労苦に報いるのに対し、チャーホフの引用は無数の民衆が今では「沢山の骨」と化したことのみを伝える。詩が本来持っていた「明」「陽」の響きは、かろうじて「ロシアの民衆は十分に耐えた／この鉄道をも耐え抜いた／あらゆるすべてを耐え抜いて／広い明るい道を切り拓くだろう」の箇所にて感得されるのだが、続いて「ただ残念なことに、その素晴らしい時代には、私も君も生まれることはない」と台詞の形で引用が締めくくられることによって、「明」の響きは再び弱められている。このことに関連して、ポドゴーリンが「新しい生活」を思考する場面に注目する。

それか、今ナデージダのたたずんでいる土手の上に、恋や幸福に関わりのない、何か面白い新しい話を聞かせてくれる別の女がいればいいのに。もし恋の話が出るにしても、それは新しい、高尚な、合理的な生活の形態——たぶんわれわれはもうその前夜に暮らしていて、時々は予感を抱くあの新しい生活の形態を呼び招くようなものでなければならぬ。(10: 22-23)

「恋や幸福」といった個人的な事柄に「関わりのない」、「われわれ」にとって来るべき「新しい、高尚な、合理的な生活」は、『いいなずけ』でサーシャがそれについて言う時と同じく、全体的な社会未来図として示されている。しかし「新しい、高尚な、合理的な生活の形態」がポドゴーリンの思考を通して「たぶんわれわれはもうその前夜に暮らしていて、時々は予感を抱くあの新しい生活の形態」と語られることから分かるように、それは現在到来してはいないし、その実態は不明である。言うなればチャーホフは、ネクラースフが「現在」に置いていた「明」をはるかな未来にまで先送りしている。

3.2. 生物学的進化に託された夢想

不思議なことに、理想的な社会のイメージがずっと先の未来に送られてもなお、その到来は人物によって確信されている。上に挙げた『知人の家で』のポドゴーリンの思考でも、「新しい、高尚な、合理的な生活の形態」はとにかく迫りつつあるものとされていた。『往診中の一事件』においても、病院助手のコロリョーフは病気の娘リーザにこう言ってきかせる。

実際、われわれの両親には、今私たちが交わしているような会話は考えもつかないものだったのですから。両親たちは夜毎、話もしないでぐっすり眠った。一方私たち、今の世代の人びとは、ろくに眠らず、苦しみ、話し、たえず自分たちが正しいかどうかを決めようとしています。ところが私たちの子供か孫の代になれば、こうした、自分たちが正しいかどうかという問題

は、もう解決されているでしょう。彼らには私たちよりもずっと物がよく見えるでしょう。五十年もたてば、生活は素晴らしくなる。(10: 84-85)

すぐあとの場面でリーザが「私たちの子供や孫は何をするのでしょうか」と訊ねても、コロリョーフは「知りませんね……。きつと何もかも投げ捨てて、出て行くでしょう」としか答えられない(10: 85)。それにもかかわらず、この引用でも、また作品の末尾においても、「生活がこの静かな日曜の朝のように明るく嬉しくなる時代」は「もしかするともうすぐそこまで来ている」(10: 85)と思われる。

「話もしないでぐっすり眠った」「われわれの両親」とは異なる「ろくに眠らず[……]自分たちが正しいかどうかをたえず決めようとしている」今の世代があり、さらに将来の世代は「ずっと物がよく見え、思慮分別に富むから問題は解決され、「生活は素晴らしくなる」というコロリョーフの論理展開に注意しよう。ここには、親の代と異なる特質が保存されていけば、子孫の代にはより優れた生存が可能になるという進化の概念と通ずる考え方が認められる。ダーウィンが動物の利他的行動などとの関係で人間の精神的・倫理的性質もまた遺伝するという考え方をあらわしたのは『種の起源』第一版の刊行から十二年後の『人間の由来』²⁴初めてだが、同書のロシア語版は1871年に英語版と同時に刊行された。トーデスが指摘するように「強固な創造説の伝統を欠いて」²⁴いたロシアで進化論は早くから広く受容されたのであり、チャーホフもまた『人間の由来』を目にしていた可能性は高いと考えられる。²⁵

言うまでもなく、本来のダーウィニズムにおいて進化は一方的な発展や進歩を意味しない。しかしながら、ダーウィンの進化論はその明快さゆえに科学の領域をこえて文化や他の領域に容易に接続可能な思考の回路でもあり、接続された途端にそれは発展的進歩観とないまぜにされてしまう。チャーホフ自身は進化論の本質を把握していたとわれわれは確信しているが、²⁶ ともかく上に挙げたコロリョーフの言うような「論理」は、生物学的進化を援用した夢想とも言うべきものだ。この「夢」と関連して、サーシャの語る「新しい生活」を今一度引用する。

教養のある、高潔な人たちだけが興味深いんだし、そういう人たちだけが必要なんだ。そういう人たちが増えれば増えるほど、地上に神の王国が訪れるのも早くなるんだから。そうすればこの町も土台から突き崩されて、あらゆるものがひっくり返ってすべてが変わる、魔法にか

²⁴ ダニエル・P・トーデス／垂水雄二訳『ロシアの博物学者たち：ダーウィン進化論と相互扶助論』工作舎、1992年、49頁。

²⁵ たとえば1883年に書かれた『催眠術の会』(На магнетическом сеансе)には、「ダーウィンの理論によれば、私はその他多くの才能と一緒にこの愛すべき才能をも父から譲り受けた」(2: 31)という一文が見られる。本文で述べたように、非生物学的特質もまた遺伝するという考えをダーウィンは『人間の由来』で初めて示したのである。

²⁶ 進化論に対するロシアの思想界・文学界の反応について、またチャーホフの進化論受容について、本稿筆者は別で詳しく論じた。高田映介『世界の瞬間——チャーホフの詩学と進化論』水声社、2020年、27-62頁。

かったみたいだね。そうしてその時こそ、ここに巨大で素晴らしい豪華な家々とか、奇跡的な庭とか、見たこともないような噴水ができて、すぐれた人々が住むようになる……(10: 208)

川端香男里は『ユートピアの幻想』のなかで科学と未来思想の関わりに触れ、「未来小説的ジャンルが優勢になった背景には、十九世紀に特に支配的であった進歩の観念がある。ことに科学の進歩が、未来にかかっていた神秘のヴェールをはがしてしまったように思われた。[……]こうして人々の想像力は技術・科学がもたらす未来の国へといっせいに解き放たれたのである」²⁷と述べている。「巨大で豪華な家々」「奇跡的な庭」「見たこともないような噴水」もまた、技術の進歩や最新の都市計画に関係している。すなわち、ここにも技術や科学の発展に裏打ちされた未来の姿が見出される。さらに、サーシャは続けて言う。

でも、大事なことはそんなことじゃない。大事なことは、今日われわれが言う意味での群衆、この悪が、その時にはなくなっているということなんだ。なぜって、その時には一人ひとりの人間が信念をもち、何のために生きているのかを知って、誰ひとり群衆に支えを見出そうなどと思わなくなるからです。(10: 208)

理想的社会の根拠となるのはやはり、「教養のある、高潔な人たちが」次第に増えていくことで「現世の悪」が解決されるという思考である。『フラストレーションの解剖』において、ウェルズ(Herbert George Wells, 1866-1946)は「平均的な人間の脳があと数立方インチ増え、生存期間が二十年のびれば」「人間の視野内の現在のあらゆる難問は夢のように消えてしまうだろう」²⁸と書いた。このような新世界への期待は、長期間にわたる現象である進化を枠組みに利用して目下の問題の解決を未来へと先送りする点に成り立つ。「来るべき人類においては、その生物学的基盤が現在よりはるかに進歩しているから、現代の矛盾など問題にはならなくなる。肉体と精神の発達、人間の「悪」をも根絶する」²⁹といった進化論的予言と、コロリョーフやサーシャの期待する子孫の知的発達は通じあっている。

しかし、生物学的進化が幻視させる「はるかな未来」は、結果としてやはり現在の人間の限界を浮かびあがらせる。すでに触れたように、『知人の家で』において、チェーホフによるネクラーフの詩編の引用の仕方は「素晴らしい時代」には現在の人間がすでに消滅していることを強調していた。

²⁷ 川端香男里『ユートピアの幻想』講談社学術文庫、1998年、187頁。

²⁸ Herbert Georges Wells, *The Anatomy of frustration*. [https://archive.org/details/in.emet.dli.2015.222317/mode/2up] 2023年5月30日閲覧。

²⁹ 川端『ユートピアの幻想』、191頁。

周囲の人々にしきりと「生活の方向を変え」させようとするサーシャの行為は、彼らをして「教養のある、高潔な人たち」であるように仕向け、彼の言う「神の王国」をあるいは実現に近づけるのかもしれない。しかし当のサーシャは「見た目は不健康で、疲れ切っており、老けて、痩せていた。咳ばかりして」(10: 216)いるのであり、「病気がとても重く、もう長くは生きられない」(10: 21)。コロリオーフもまた、先に挙げた発言を「ただ残念なことに、私たちはその時まで生き長えませんが」(10: 85)と結ぶ。

以上から、現在から隔たった、理想的社会像としての「新しい生活」の表象があること、ただし「生活の新しい形態」の予感はあるも現在の人々がそこに加わる可能性、「以前の生活秩序から脱却する可能性」は認められていないことが指摘できる。

まとめ

本論は、まず『いいなずけ』に明らかな「逃避」のモチーフに注目し、婚約破棄と家出という重要な出来事につながるナー ज्याの逃避願望の発端は定かでないこと、ペテルブルグでの新生活のヴィジョンが不明瞭であることを、校正での変更点や語りの特徴との関わりから明らかにした。江川卓が指摘するように、「この作品は草稿から決定稿に近づくにつれ、ナー ज्याの未来の生活のイメージがしだいに抽象化されていく傾向をもっていた」³⁰ のである。そのために、「新しい生活」という未来に向けたナー ज्याの出発は、周囲の人間やこれまでの生活の一切を過去へと切り離すこととの対比によって果たされることになる。しかしながら、過去との断絶は現在地点における荒廃の危険をはらんでもいた。

さらに本論は、『知人の家で』や『往診中の一事件』にも共通して見られる、個人のレベルを超えた「新しい生活」の表象に注目した。子や孫の世代には今ある問題はすべて解決され、生活が素晴らしく、明るくなるという「新しい生活」の観念について、生物学的進化と混合した進歩の夢想と関連づけて論じた。以上の分析により、「新しい生活」の表象は人物の主観的願望と生物学的進化にもとづく社会進歩の夢という二つのレベルから構成されること、二つのレベルのどちらにおいても、「新しい生活」への到達が実際には困難なものとして描かれていることが指摘できる。

本論の分析を通時的な観点から整理するとどうか。1889 年の『退屈な話』で、ニコライ・ステパーノヴィチは「人類はただ科学によってのみ、自然と自己に打ち勝つことができる」(7: 263)と信じ、「百年後に目を覚まして、科学がどうなっているかひと目見てみたい。あと十年ほど生きてみたい」(7: 307)と願う。余命少ない老教授が描く未来には、主観的な願望と科学の発展と不可分の理想的社会像とが未分化な状態で見出される。1898 年の『知人の家で』『往診中の一事件』では、数世代先

³⁰ 江川卓「この空の下のどこかに……」チェーホフの時間と空間『ユリイカ』10 巻 6 号、1978 年、92 頁。

の子孫に訪れる、社会レベルでの「新しい生活」がもたら展開されていた。そして 1903 年の『いいなづけ』に至り、「新しい生活」の両面は、ナージャとサーシャに分かたれつつも共有され、より複雑な形で同時に存在している。したがって、「新しい生活」の表象について、まず手法の深化を認めることができる。同時に、未来の内容はいつも一定以上に具体化されたことはなく、『いいなづけ』では語りの特徴などによって曖昧さがむしろ強められている。この作品で「新しい生活」への到達は幾重にも難しくされていると言えるのであり、ナージャの出発が様々な解釈を呼んできた理由のひとつはここにも存在すると考えられる。

とはいえ、シュストフが「チェホフは自分の仕事を持っていた[……]彼は二十五年の長きに亘って、陰鬱な頑迷さを以て、只もろもろの人間のもろもろの希望を殺すことに没頭していた」³¹と断言した当時の議論に立ち戻って、チェーホフの虚無主義についてここで述べようしているのではない。本論の分析を通じて最後にわれわれの目を引くのは、「新しい生活」へ行きつくことの困難さのなかに読み取られる、時間の動きである。今一度振り返ろう。過去が断絶されるその瞬間に人物に近づき「差し招き」「魅了」する未来は、現在の不安定さをうちに含んでいた。あるいは、はるか先の未来を確信しても、現在地点に生きる人物はその時まで生き長らえはしなかった。付け加えて言えば、作中で明るい未来がすぐそこにあると感じられる時にも、それはただちに現在の行為や考えに代わってしまう。いずれの場合においても時間は静的ではなく、未決定であり、刻々と変化していく。チェーホフの作品にはクロノロジカルな時間への指示が多用され、物語を前へ推し進めることは知られている。³²しかし、チェーホフの描いた時間には諸相がある。その本髄を追究していくためには、人物の知覚を中心として過去・現在・未来が絶え間なく入り混じりテキストから生じてくる仕方や、数百年先の未来に向かって流れ続けて行く時間と、現在地点に置かれた人物の限定的な時間との関わりについて、さらに分析を深めていくことが有効であると考えられる。

(たかだ えいすけ)

³¹ レオ・シュストフ／河上徹太郎訳「虚無よりの創造(チェホフ論)」『チェーホフ研究』中央公論社、1969 年(原著は 1908 年)、9 頁。

³² たとえば、高橋晶子「時の永遠の連鎖:チェーホフの創作と時間」『大阪大学言語文化学』3 号、1994 年、68 頁。
Скибина О. М. Художественные приемы отражения времени и пространства у Чехова // Вестник Волжского университета имени В.Н. Татищева. 2019. № 4. Том 1. С. 45-46. などを参照されたい。

Chekhov's Depiction of "New Life": A Study of "Betrothed"

Eisuke TAKADA

This study delves into the recurring themes found within Chekhov's later works, specifically the emergence of a hopeful "new life", a departure from the preceding life order. We concentrate on Chekhov's final piece of prose, "Betrothed", scrutinizing the portrayal of the "new life" through the lens of the narrative structure of the work itself.

The initial chapter of this study tracks the modifications in the storyline, characters, and content of the narrative, and their implications on the Chekhovian motif of "escape", which represents a character's desire to abscond from their current circumstances. In the process, it illuminates how the conceptualization of the "new life" progressively became less distinct as revisions were undertaken.

The second chapter hones in on the portrayal of the past in "Betrothed", scrutinizing how the protagonist's departure in the story entails a detachment from the past embodied in the characters surrounding her. This analysis is contextualized by contrasting it with the representations of the characters' present and past in "A Boring Story" and other works.

The third chapter shifts attention to the manifestation of the "new life" as seen in "A Visit to Friends" and "A Doctor's Visit", reinterpreting this theme from the standpoint of human aspirations intertwined with biological evolution.

Through this comprehensive analysis, this study endeavors to construct a theoretical framework to better understand Chekhov's approach to depicting the future and the past.